

「私を助け出してください」

(詩篇7:1-17)

一、「ダビデ」の訴え

(※ 作者をダビデとして読んだため、「ダビデ」と表記しました。)

1節を「ご覧ください。私の神 主よはあなたに身を避けます。どうか追い迫るすべての者から 私を救い助け出してください。」と訴えています。この表現より、「尋常ではない、切羽詰まった状況を思い描くことができます。と言いますのは、私の神 主よ」と呼びかけているからです。詩篇において、「ダビデ」が神に呼びかける際は「主よ」がふつうです。所々に「私の神 主よ」という呼びかけが現れます。詩篇7篇には2箇所現れます。1節と3節です。「ダビデ」が精神的に追い詰められていた、と読み取ってよろしいかと思えます。そのように受けとめると、1節、2節の言葉は、単なる誇張ではなく、ほんとうに危険が迫っていたことになりま。神を信じ、神を信頼する者が心乱されることのないと考えたら、おおちがいです。「ダビデ」が苦しんでいたのは、自分が悪い仕打ちを受ける理由が見いだされなかったからです。「罪を犯したら罰が下る」とは、大なれ小なれ多くの人が思うことですが、特に古代人

にはその傾向が強かったです。それは、ヨブ記を読むときに分かります。「私は罪を犯していないのに、なぜ災いが下るのか」という疑問です。

そこで「ダビデ」は、自らの潔癖さを主に訴えます。3節から5節です。「私の神 主よ もしも 私がこのことをしたのなら もしも 私の手に不正があるのなら もしも 私が親しい友に悪い仕打ちをしたのなら また 私に敵対する者から ゆえなく奪ったのなら 敵が 私のためしに追い迫り追いつき 私のいのちを地に踏みにじめるようにし 私の栄光をちりの中に埋もれさせてください。」と。

二、神を信じる者の思考

神を信じる者は——旧契約の時代に生きた「ダビデ」も、新契約の時代に生かされている私共も基本的には同じです——、災いに遭ったときに、相手を直接に恨むことは少ないと思えます。「ひどいことをされた」という記憶は残りますが、「なぜ、このようになってしまったのであろうか。なぜ、主はこうなることを許されたのであろうか」と考え込むことではありません。と言いますのは、ふだんから手の付けられない人間が責めてくるのではなく、ごくふつうの人が一時的に神がかり的になったかのように変わってしまうからです。それはまた、反対になることもありま

す。すなわち、ちょっとしたことから相手を責めてしまう場合です。そのようなとき、神を信じる者は祈ります。「神さま、裁いてください」、すなわち「神さま、判決を下してください」と。信仰者はどのような時にも祈りに導かれます。これは、私共が賜っている祝福です。人が裁くと、神の義は現れません(ヤコブ1:20)。ですが、神が裁かれると、神の義が現れます。神の義とは、ただしただけでなく、憐みが伴うものだからです。ですから、祈ったら良いのです。

「ダビデ」は、みごとに祈っています。それが、6節から8節です。「主よ 御怒りをもって立ち上がり 私の敵の激しい怒りに対して、ご自身を高くし私のために目を覚ましてください。あなたにはさばきを定められました。国民の群れをあなたの周りに集め その上の高いみくらにお帰りください。主は諸国の民にさばきを行われます。私の義と 私にある誠実にしたがって 主よ 私をさばいてください。」と。

三、復讐は神が為さるること

続いて、11節から13節をご覧ください。「神は正しい審判者 日々 憤る神。立ち返らない者には 剣を研ぎ 弓を張って 狙いを定められます。その者に向かつて 死の武器を構え その矢を燃える火矢とされます。」とあります。人をただしく裁くことのできるお方は、

神だけです。11節に「神は正しい審判者」と語られています。そのとおりです。私たちがって、人を裁くことはできません。「できます」どころか、心の中ではしばしば裁いているかも知れません。ですが、人の裁きは神の義を実現させません。そこで、私たちが為すべきは、祈ることです。自分で手を下してはなりません。神は、不法やあらゆる悪を裁かれます。「ダビデ」には、それが見えたようです。14節から16節です。「見よ その者は不法を宿し 書悪をほらみ 偽りを産んでいます。彼は穴を掘って それを深くし 自分が作った穴に落ち込みます。その書悪は自分の頭上に戻り その暴虐は自分の脳天に下ります。」と、祈っています。

四、神を信じる者の勝利

神を信じる者は、この世を支配する悪魔の虜になることはなく、神への賛美と、神が用意された「余裕」と言います。ようか、「平安」に導かれます。それが、17節です。「私は主をほめたたえます。その義にふさわしく。いと高き方主の御名をほめ歌います。」と「ダビデ」は主をほめたたえています。「ダビデ」は、イエス・キリストをこそ知りませんでした。が、御霊の働きにより、神の恵みの奥深さを知るに至りました。神を信じる者に、不必要な恐怖は生まれません。祈るすべを知っているからです。